

37 江戸期本草家の北陸への関心 (一)

山本溪山の能登半島・立山採葉紀行

正橋 剛 二

平安時代以来、越中立山は信仰・修験の山として開かれ、白山、富士山とともに、三山禪定の山として多くの人びとを惹きつけていた。また、立山地獄の説話(『今昔物語集』)や十辺舎一九の戯作(『越中楯山幽霊邑讐討』)などの文芸作品の舞台としても取上げられて来たが、時代の流れとともに自然科学的な関心も集めるようになってた。

本邦の本草学は緩やかに進歩した中世を経て、近世には従来の大陸からの影響に加えて、西欧の博物学を受容して、一段とその速度を速め、同時に多数の本草家を輩出した。彼らは身近近在の山野を手始めに、次第に非日常的な自然界、すなわち、水棲の魚介・藻類や、遠隔地の植生へと視野を拡げ、踏査の足を伸した。

北陸の自然は畿内中心に関西系の本草家によって探索され、記録にも残された。もちろん、一部、記録として残されなかったもの、また、残されたものすでに記録の所在が不明となっているものなどあるが、列挙してみると次のようになるかと思う。

(1) 稲 若水―『金沢草木録』(元禄七年)

(2) 野呂元丈―『北陸方物』(不詳)

(3) 山本亡羊―『亡羊先生入越紀行』(不詳)

(4) 畔田翠山―『白山草木志』(文政五年)

―『立山草木志』

―『北陸卉牒』

}(文政年間か)

(5) 前田利保―『本草通串』

―『草木通串証図』

}(嘉永年間)

(6) 山本溪山―『入越日記』(嘉永四年)

右のうち(1)乃至(3)は書名が知られるのみで、現在その所在は不明である。所在を御存知の方はぜひ御教示をお願いしたいと思う。(4)のうち『白山草木志』および(5)については既に全容が紹介されているところである。

未紹介のうち(6)『入越日記』について今回紹介を試み

たい。

山本読書室第九代亡羊（一七七八一—一八五九）の六男章夫（一八二七一—一九〇三）、始め溪山、後改号溪愚、同家第十一代）は嘉永四年（二八五二）四月一日より同年九月十七日まで北陸地方の山野へ採葉紀行をして、この克明な記録を『入越日記』として残した。タテ二七センチ、ヨコ一九センチ、墨付七〇丁が題箋を付し四ツ目とじて装幀されている。全日数一六四日間で総延長千料を越す旅程は概略次のようである。

四月一日、前年入門して帰国する門人岡道伯（越中人）を同道、同砲、門弟たちに見送られて出発した。瀬田で岩鏡草を手にした堀田龍之助に会う。北国街道を下り、福井、吉崎を経て大聖寺二泊、一〇日金沢の岡嶋家（明人）に入る。一八日まで滞在して市内各地を見物、一九日高岡日下家に着いた。同家は祖父封山の生家である。八月二五日帰途に着くまでここに滞在するが、この間、高岡の医師たちと交流を深める一方、津島北溪にすすめられ、六月七日より七月一五日まで三九日間の能登一周、七月二二日から二八日まで七日間、高峰元種と同行しての立

山登山、祖父封山の撰文の刻まれた布勢円山の石碑探訪の一泊旅行などを行っている。

この間に記録した植物・動物・鉱物名は二四〇種、会った人物名九七人、作った漢詩八〇編、能登紀行中には名所として名高い風景画十三枚が挿絵として描かれている。

原文はすべて漢文（白文）で読み違えた所もあるかも知れないが、約一五〇年前の高岡の医師達の交流の状況を知ることができ、また当時の風俗、習慣、年中行事などの記述は郷土史的にも興味深いものであった。

立山での登山道や山小屋の状態、植生の状況など、現在と比較して、それぞれ興味深いものであった。著者は三千米級の立山についてはとくに「奇花、異草極めて多し」と書き五九種の植物名を記録している。七〇丁に及ぶ長編であるので発表は立山登山が中心になるであろう。

（医）白雲会 呉羽神経サナトリウム